

パフォーマンス課題による授業改善

～校内研修支援プログラムの実践を通して～

所属機関 福岡市教育センター

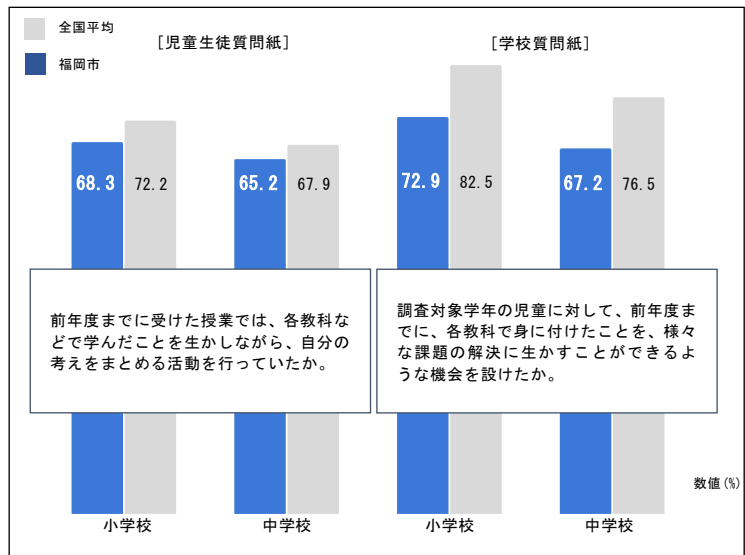
所属校 福岡市立高宮小学校 福岡市立城原小学校

職・氏名 教諭・金光功樹 教諭・竹上利央

1 主題設定の理由について

グローバル化や ICT の革新など変化が激しい社会において、学校教育においては、主体的・対話的で深い学びの実現を通して子どもたちの資質・能力を育成することが求められている。学習指導要領解説総則編には、子どもたちが、教育の内容を既得の知識及び技能と関連付けながら深く理解し、他の学習や生活の場面でも活用できるようにすることが重要であると示されている。現代社会をよりよく生きていくための資質・能力を育成する上で、子どもたちが学ぶ意義を感じ、教科の本質的な楽しさに触れ、教科やその背後にある世界や文化への興味を失わないようにすることは重要である。

しかし、令和4年度全国学力・学習状況調査における質問紙調査（【資料1】）では、「各教科での学びを生かすことができたか／生かす機会を設けたか」に対する肯定的回答は、児童生徒質問紙、学校質問紙ともに本市の結果は全国平均を下回った。子どもが実生活や実社会に学びを生かすためにも、教師が教科の本質を捉え、社会とのつながりを意識した授業づくりを行うことが、本市において喫緊の課題である。石井（2018）は、子どもたちの有意義な学びへの要求に応えるためには、教科の本質を重視する「真正の学習」を追求することが重要であるとし、パフォーマンス課題を設計することで子どもたちの有意義な学びを生み出すと述べている。そこで、研究主題をパフォーマンス課題による授業改善と設定した。



【資料1】全国学力・学習状況調査における質問紙調査の結果

2 副主題について

校内研修支援プログラムとは、市内の学校に向けていくつかのテーマを基に校内研修を提供するために開発、パッケージ化したものである。国内外の最新動向を踏まえた学校教育の在り方について調査研究を行い、研修支援プログラムを開発し、依頼を受けた学校にて研修を実施する。

『パフォーマンス課題とルーブリック』の校内支援研修プログラムでは、研修のねらいを「体験や対話活動を通して、パフォーマンス課題とルーブリックの意義がわかる」として、開発、実践し、受講した教師の授業改善につながるようにする。

3 研究の実際

(1) 「パフォーマンス課題とルーブリック」についての調査

校内研修支援プログラムを開発するにあたって、まず、パフォーマンス課題とルーブリックについての調査を行った。定義や概論については、京都大学の西岡加名恵教授の文献や論文を中心に読んだり、気づきや疑問を交流したりすることで理解を深めた。次に、逆向き設計論で提唱されているように「目標」と「評価方法」と「授業の進め方」を三位一体のものとして考えながらパフォーマンス課題を活用した単元を設計した。さらに、作成

作成するために必要なこと		
□ 理解させたい知識・技能、求める思考・判断・表現をもとに考える		
□ 状況を設定し、やることを明記する		
魅力的なパフォーマンス課題のルーブリック		
	子どもの目的	教師のねらい
◎の例	子どもが課題を自分事として捉えるために、リアルな状況が設定されている。	課題を解決するために、必要な知識・技能が他の単元・教科等で、どのように使えるか教師が説明できる。
○	子どもが課題に対して共感できるように、仮想の状況が設定されている。	課題を解決するために、必要な知識・技能をどのように使えばよいか教師が説明できる。
△	状況が設定されていない。	課題を解決するために、必要な知識・技能について教師が説明できない。

したパフォーマンス課題に長期研修員が実際に取り組み、課題を改善していった。最後に、パフォーマンス課題を活用した授業実践の見学をしたり、実践例を調査したりした。

それらを踏まえて、「よいパフォーマンス課題とは何なのか」という問いについて考え、課題を作成するためのチェックリストとルーブリック（【資料2】）を作成した。

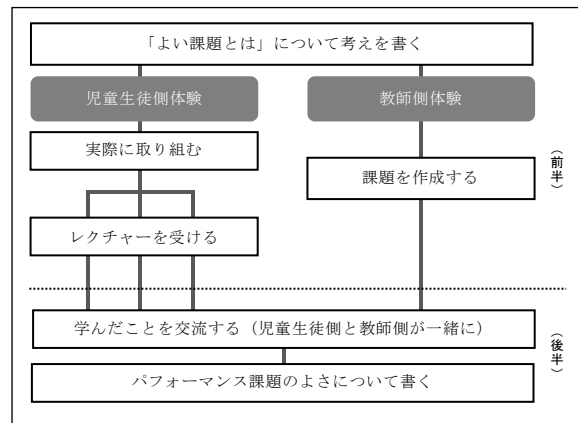
【資料2】チェックリストとルーブリック

(2) 研修の構成

「よい課題とは」という「本質的な問い」を軸に逆向きに研修を構成した（【資料3】）。

前半は、全体で問いをもたせた後、児童生徒側体験と教師側体験に分けた。児童生徒側のレクチャーでは、知識構成型ジグソー法を活用し受講者の主体性にアプローチした。パフォーマンス課題という言葉をはじめて聞く受講者がいることも鑑み、「本質的な問い」や「永続的理解」等の用語について、今回は深く触れないようにした。

後半は、学んだことをアウトプットするという流れで組み立てた。



【資料3】研修の流れ

(3) 研修の工夫

ア 自己選択する場面の設定

受講者が主体的に研修に取り組むことができるよう、学ぶ内容を自己選択する場面を設定した。

事前に、児童生徒側と教師側の体験をパフォーマンス課題の理解や実践等をもとに選択させ、体験を通して学べるようにした。児童生徒側の体験では、実際に長期研修員が作成したパフォーマンス課題（【資料4】）に取り組んだ後、受講者がパフォーマンス課題について疑問をも

竹上は、5歳の娘の誕生日にサプライズでケーキを頼もうと思います。娘は、とてもケーキが好きで「前お姉ちゃんが食べたケーキと同じ大きさのケーキが食べたい」と言っています。以前買ったケーキ屋さんが閉店したため、同じようなケーキが買えるお店を検索したところ、ロールケーキをセットで販売しているお店を見つけました。娘が喜ぶよう、家族4人分の注文として、どのセットを選べばよいか、竹上にアドバイスしてください。

<条件>

- ・アドバイスは口頭ではなく、提案用紙を私へ渡すこと
- ・提案用紙には、なぜそのセットを選んだのか理由を記入すること。

購入予定のロールケーキ

直径は8cm

- ①セット 2cm × 4個 600円
- ②セット 18cm × 1個 1200円
- ③セット 20cm × 1個 4300円→1100円

前お姉ちゃんが食べたケーキ(1人分)
直径12cmサイズの1/4、高さ4cm

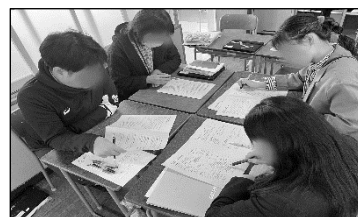
【資料4】児童生徒側が体験するパフォーマンス課題

つポイントを予想して、それに応じたコースを3つ用意した。受講者が、自分の興味関心に沿ってコースを選択し、レクチャーを受けられるようにした。

また、児童生徒の体験と並行して教師側の体験を実施した。自分の選択した教科(単元)の中で、パフォーマンス課題を作成させた。その際、長期研修員が必要に応じて介入し作成を補助した。

イ アウトプットの場の設定

パフォーマンス課題とループリックについて理解が深まるよう児童生徒側と教師側の双方にアウトプットの場を用意した。児童生徒側の受講者は、あらかじめ決めておいたグループで集まり長期研修員が作成したパフォーマンス課題に取り組んだ。自然発生的な対話をねらうために、課題に取り組む前に、初めは一人で取りませ、途中から対話をしながら課題解決ができることを提示した。自己選択のレクチャーでは、レクチャー後にグループのメンバーに学んだことを共有することを事前に伝えることで、目的をもたせることやインプットしたことの理解につなげられるようにした。



【資料5】アウトプットの様子

教師側の受講者は、作成したパフォーマンス課題をグループの中で紹介し、レクチャーを受けた受講者がそれぞれの視点で価値づけを行った(【資料5】)。

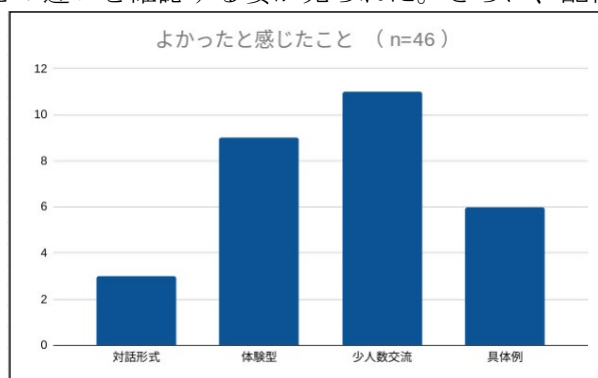
(4) 校内研修支援プログラムの実際

校内研修支援プログラムとして、中学校2校(対面式)と教育センター研究発表会(オンライン)で1回の計3回の実践を行った。中学校の実践では、児童生徒側の体験で小学校6年生の算数のパフォーマンス課題を実施した。「何番になった?」や「私こう考えたんだけど」等、自然と他人の解と自分の解との違いを確認する姿が見られた。さらに、配付したループリックや長期研修員の介入をもとに、受講者は解にたどり着くことができていた。

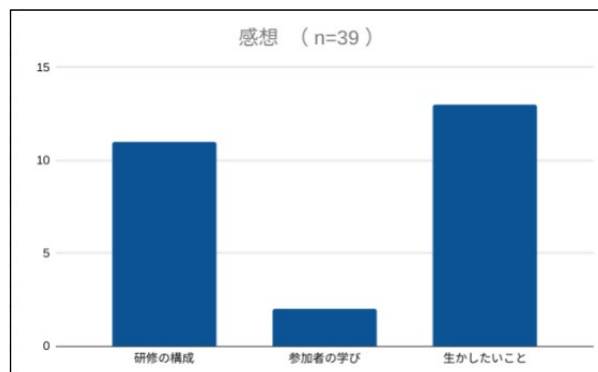
その後、実際に児童生徒がパフォーマンス課題に取り組んだ時の最適解を紹介し、自分の最適解を見直したタイミングで、児童生徒側の体験を通して疑問に感じたことや受講者が興味関心をもったことについて各個人がレクチャーを選択できるようにした。レクチャー後に学んだことの交流を行い、教師側を体験した人がいるグループでは学んだことをもとに価値づけを行った。グループによっては、さらにより課題になるようアイデアを出し合っていた。

【資料6~8】は、教育センター研究発表会後のアンケートである。アンケートは、記述式で長期研修員が分類した。

【資料6】は「よかったと感じたこと」についての集計結果で、「実際に体験してみ



【資料6】よかったと感じたこと

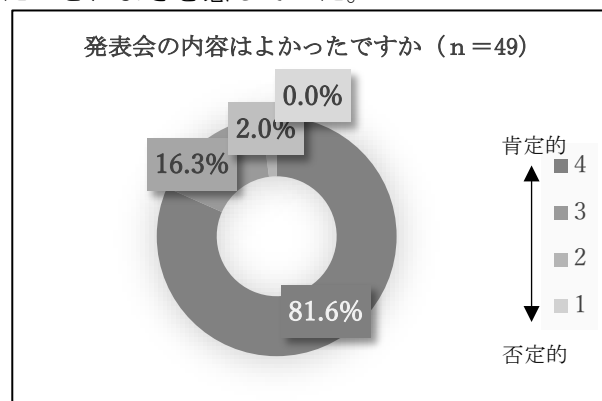


【資料7】感想

て子どもたちに取り組みさせる価値を感じられた」「いろいろな先生と意見交換ができてありがたかった」等、少人数交流や体験型にしたことによさを感じていた。

【資料7】の「感想」では「はやく実践してみたいと思える内容だった」「これからの授業でも取り入れていき、私自身でもより良い形を探していこうと思った」というような「生かしたいこと」についての記述が多く見られた。

【資料8】は、「満足度」についての集計結果を載せている。アンケートの回答に協力していただいた方の約98%の方が満足しているという結果だった。



【資料8】満足度

(5) 考察

回答には上記以外にも「数学と日常生活と結びつける大切さの根拠がはっきりして、とてもすっきりした」「自然と対話するきっかけになる課題だと改めて感じた」というものもあり、体験型のプログラムにすることで、自分自身が主体的にアウトプットを行い、考えや理解に広がりや深まりをもたせることに効果があったと言える。そして、何よりもパフォーマンス課題の良さを実感できたことが大きいと考える。

また、感想から「はやく実践してみたいと思える内容だった」「今日学んだことをいかして子どもたちと学びを深めていきたい」「子どもたちが楽しみながらも力がついていく学習方法をもっと学んでいきたいと思いました」という意見が多数見られたことから、パフォーマンス課題が子どもたちの資質・能力の育成に有効であると感じた受講者が多かったと推察される。

4 研究のまとめ

(1) 成果

受講者の事後アンケートで「実践してみたい」「子どもが主体的」「単元のねらいを明確に」という言葉が多く使われていたことから、パフォーマンス課題が授業改善に与える影響が大きいと言える。

(2) 課題

「パフォーマンス課題の一覧があれば、ありがたいです」と記述された受講者もいたことから、授業改善を行っていく上で方法に偏りすぎないよう本質的な内容についておさえる部分を再度見直す必要がある。

参考資料

- 1 文部科学省 小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編 東洋館出版社（2017）
- 2 西岡加名恵・石井英真編集 「Q&Aでよくわかる！『見方・考え方』を育てるパフォーマンス評価」 明治図書（2018）
- 3 西岡加名恵・石井英真 『教科の「深い学び」を実現するパフォーマンス評価―「見方・考え方」をどう育てるか』 日本標準（2019）
- 4 京都大学大学院教育学研究科 E.FORUM 事務局 「E.FORUM 教育研究開発フォーラム」 <e-forum.educ.kyoto-u.ac.jp>